

渡辺淳一

脳は語らず
かた



新潮文庫

のう かた
脳 は 語 ら す

新潮文庫

わ - 1 - 19



平成三年二月十五日 印刷
平成三年二月二十五日 発行

著 者 渡 辺 淳 一
わた べ じゅん いち

発 行 者 佐 藤 亮 一
さ とう へい いち

発 行 所 株式 会社 新 潮 社
しん せう しゃ

郵便 番号 一 六 二

東京 都 新宿 区 矢 来 町 七 一

電話 業 務 部 (〇三)三二六六―五一一
編 集 部 (〇三)三二六六―五四四〇

振 替 東京 四 一 八 〇 八 番

価格はカバーに表示してあります。

乱丁・落丁本は、二面倒ですが小社通信係宛へ送付
ください。送料小社負担にてお取替えいたします。

印刷・二光印刷株式会社 製本・加藤製本株式会社

© Jun'ichi Watanabe 1991 Printed in Japan

ISBN4-10-117619-1 C0193

新 潮 文 庫

脳 は 語 ら ず

渡 辺 淳 一 著



脳
は
語
ら
ず

特 報 班

1

「いやあ、遅くなりました」

榎田昌平が「週刊日々」の編集室に駆け込んだのは、水曜日の午後八時過ぎだった。

三十坪はあるだっ広い編集室に残っているのはすでに十人前後で、それも机のかげで将棋をさしたり、椅子に足をあげてのんびり雑誌を読んだりして、まともに机に向かって仕事をしているのは、二、三人である。

「ほい、待ってた」

榎田がとび込むと同時に、いままで将棋を観戦していた池谷が入口に向かって手をあげた。

「どうだった」

「それがなかなか難かしくって」

榎田は荒い息づかいのまま、ポケットからハンカチを取り出して額の汗を拭くと、池谷と

並んで編集室の右端の机の前に坐^{すわ}った。

「でもとにかく、患者の奥さんと医者には逢^あえたんだろう」

「それが院長には逢^あえたんですが、肝腎^{かんじん}の手術をやった医者のほうには……」

「駄目^{だめ}かい」

「三日前から休んだままとかで、行先がわからんです」

「家は？」

「電話をしても誰^{だれ}も出ないし、行ってみただけど真っ暗で」

「病院ではわからんのか」

「みんな口が堅くて、どうにもなりません」

槌田は呼吸を静めるように一つ大きく息をつくと、背広の内ポケットからメモ帳を取り出した。

「じゃあ逢えたのは院長と、奥さんと……」

「それが奥さんは、このことに関してはすべて弁護士に任せてあるから、そちらにきいてくれっていうんで」

「で、いけそうかい」

「そりゃひどいもんです。あんなことしかしておきながら、院長はまるで反省の色がないんですから」

「ようし、じゃあ、たっぷりとつちめてやろうか」

池谷は立上ると、二つ先の机から原稿用紙を持ってきた。

「おい、もう八時半だぜ、こりゃ明日の昼までしんどいぞ」

「済みません」

槌田は軽く頭に手を当てて、

「これでも一生懸命歩き廻^{まわ}ったんですから」

「写真はあるんだろうね」

「いま吉岡が現像しています。院長と奥さんと、病院だけで……」

「まあそれだけありやいいだろう、じゃあ、きこうか」

池谷は銜^{くわ}え煙草^{たばこ}をもみ消すと、鉛筆を手を持った。

槌田と池谷はともに「週刊日々」の特報班に所属している。もともと二人とも正式の週刊日々の編集者でなくフリーだが、以前はその親会社の大栄社にいた関係で、週刊日々の専属のような形になっている。

槌田は三十二歳だが、五年前からいわゆる取材専門のデータマンをやっている。

池谷はアンカーといって、データマンが集めてきた取材記事を見て、原稿を書く。普通、この役目は、ルポライターなどを長年やってきて、文章力のある人が担当するが、池谷もその一人で、今年三十八歳になる。

週刊誌の記者は、以前は自分で取材してきて、それを書いたが、今は取材と記事を書く仕事を分業しているところが多い。

とくに週刊日々は、社外のフリーの人を多く使っている関係で、かなり早い時期からこれが徹底している。

週刊誌の特報記事は、このデータマンとアンカーの組合わせで出来あがる。いくらい取材をしてきても、アンカーが悪ければ記事が生きないし、アンカーがよくても取材が悪ければ、いいものは生まれない。両者は車の両輪のようなものである。

この週刊日々の発売日は、毎週月曜日である。一部都内の早いところでは日曜日の午後に出るが、それはキオスクのようなどろろにかざられる。

この発売日に合わせて、週刊日々の次週号の企画は、その前々週の土曜日に編集長と各デスクが立合って決定される。

続きものや、囲みものは問題はないが、トピックスものは決めるとはいつても、多少流動的な余地は残されている。

取材してきたものが使えなかったり、途中で大きな事件が起きたりして、記事のさしかえがおこなわれることがあるからである。

ともかく一応、土曜日に決定された企画は、月曜日に、各デスクから、そのグループの取材記者に伝達され、それを受けた記者が各方向にとんでいく。

月、火がこの取材記者の最も忙しいときである。

火曜日の夜か、遅くとも水曜日昼くらいまでには大体取材が終り、カメラマンのほうから、それに使う写真も出揃^{でそろ}ってくる。

ここできいよいよアンカーの出番となる。

アンカーはまず取材記者から話をきいて、それをもとに原稿を書く。原稿は遅くとも木曜一杯には出来上り、デスクや編集長が目を通したうえで、オーケーがでて印刷所に廻される。木、金と校了作業があり、翌週の月曜日には、店頭に出るといふ運びになる。

このサイクルからいうと、取材の終りが水曜日の夜というのはかなり遅い。このあと話をきいて、明日の夜までには決定稿を出さなければならぬのだから、アンカーの池谷が渋い顔をするのも無理はない。

2

今度、池谷、槌田の組で担当したのは、すでに新聞で報道された事件の、あと追い記事である。

普通、週刊誌では、その誌だけ独自で追った、いわゆる独占ネタの他に、他社と競合して追う共通ネタがある。一般にこういうネタは、すでに一度新聞、テレビなどで報道されたあ

となので、週刊誌では少し角度を変えてやることになる。

今度の事件は先週、「毎朝新聞」の社会欄で報道されている。そのすぐあとに、今週号の企画会議があつて、これをさらに追つてみようということになつたのである。

いまから一週間前、三月五日付の毎朝新聞の社会欄には、五段抜きで、「不当な脳手術で廃人に」という大きな見出しがあり、その横に「東辰病院で人権無視の疑い」「家族が賠償の訴えおこす」とでかでかと出ている。

さらに初めの通し記事は、

「脳の一部を切截するロボットミ―（前頭葉白質切截術）により、夫の性格が一変し、廃人同様になつたとして、東京都墨田区東向島六丁目に住むAさん（三十二歳）の妻K子さん（二十八歳）が、東辰病院の医師を相手どつて、東京地裁に八千万円の損害賠償と慰謝料を求め訴えをおこした。またこれとは別に、ちかく院長および手術した医師を、傷害罪で告訴、刑事責任も追及することになっている。Aさんは手術から約二年経っているが、その後ほとんどものもいわず、いままベッドに寝たきりで廃人同様の生活を送っている」と書かれている。

さらに新聞の記事は次のように続く。

Aさんは去る五十×年十月、かねて酒好きで酒乱の氣があるところから、千葉県市川市本

八幡^{やわた}にある医療法人東辰精神病院に入院して治療を受けていた。ところが翌年二月、凶暴性がひどいとして、妻のK子さんにも充分の説明もなく手術がおこなわれた。

この結果、Aさんは一時的に大人しくなったが、それ以来、急にもの忘れがひどくなり、問いかけにも反応が鈍く、時には失禁するようになった。さらに、それまでは作業療法などで戸外にも出られたのに、それ以後はほとんど外出せず、ベッドにうずくまったきりになった。

このあと東辰病院では治ったとしてAさんを退院させたが、すでに働く気力はなく、止むなく再び都内の某病院に医療扶助を受けて入院する破目になってしまった。

この結果、妻のKさんは三歳になる子供をかかえて生活に困り、現在上野の小料理屋で働いて、細々と生計を立てている。

同じ墨田区に住む弁護士^{いがらし}の五十嵐高雄さんは、この話をきいて憤慨、早速、Kさんと打合わせた結果、訴訟をおこすことに踏みきった。

同弁護士は「たかが少し酒乱の気があるというだけで、本人にも家族にも了解もえず、勝手に手術をして、脳の一部を破壊するとは人権侵害もはなはだしい。このおかげでAさんは完全な廃人にされてしまったが、こんなことは現代社会で許されることではない。医者^{りっせん}の金もうけも、ついにここまでできたかと慄然たる思いである」といつている。

これに対し河原院長は「ロボトミーの適応に当っては、嚴重に調べた結果、ごくかぎられ

た例にしかおこなっていない。Aさんは以前から凶暴性があつたが、だんだんそれが目立ちはじめ、看護婦にも再三乱暴を働いたので、他の先生とも相談の結果、仕方なくおこなった。決して間違つた治療だつたとは思っていない」と話している。

また執刀医の佐伯医師は、

「私も慎重に診察した結果、必要だと思つたのでやつた。この手術が何故問題になるのか、自分でもわからない」といつている。

なおこの病院は三年前に開設され、百二十ベッドで、定員四名の医師が必要なのに常勤は院長一人、非常勤医師三人で、看護婦も定員より十名も足りなかつた。

執刀をした帝都大学医学部脳外科助教授佐伯正人医師も、東辰病院に手術を依頼されておこなつた非常勤医師である。

以上が三月五日付、毎朝新聞の記事の概略である。

3

「まず、そのロボトミー^{そで}って手術だけど、もう少しくわしく教えてくれよ」
池谷はワイシャツの袖をたくしあげ、メモ帳を開いた。

「僕もあまりよくはわからんですが、一応簡単に説明しますと」

槌田は原稿用紙のうえに、簡単な頭の側面像を描いた。

「人間の脳は中心部に脳幹部があつて、まわりを大脳がマントのように囲んでいるわけ
す」

「なるほど」

「で、この大脳が四つの部分に分かれていて、前方の額の部分にあるのが前頭葉、頭の上のほうにあるのが頭頂葉、うしろの部分の後頭葉、横の部分を側頭葉といいます」

槌田は脳の各部に、それぞれの名称をふつていった。

「この各部分はそれぞれ専門の働きがあつて、たとえば後頭葉ではものを考えたり、見る働きをし、側頭葉ではものを記憶したり判断する。そして前頭葉は人間の情緒や意志に関係する働きを司るところで、喜んだり悲しんだり、ものを芸術的に創造したりするのも、すべてこの前頭葉の働きなわけです」

「じゃあ、俺達おれたちは前頭葉の発育が弱いわけだ」

「僕はかなりおでこがありますから」

槌田は自分の額を押さえながら笑った。

「とにかくこの前頭葉は大脳の四割を占めていて、人間だけに発達した特殊なもので、この部分が広いから、他の動物とは違った高等な精神活動がおこなえるわけです」

「たしかに、俺の頭は猿さるよりは大きいだろう」

池谷は自分の額を、たしかめるように手を当てた。

「それでロボットミーというのは、この前頭葉の一部を切りとる手術法なわけです」

「そんなことで、乱暴な男が大人しくなるのかね」

「これは精神科の本に書いてあったんですが、人並み以上に暴れたり、反抗するのは、この感情や意志をコントロールする前頭葉が狂っている。おさえがきかなくなっているわけです。それでこの一部分をとって、大人しくさせようというわけです」

「すごいことやるねえ」

「これはたしかに効果があるらしいんです。たとえばそれまでひどく怒りやすかった人が、怒らなくなり、愛想がよくなったり、非常に頑固がんこだった人が、あまり自分を主張しなくなつて、あきらめがよくなったり」

「じゃあ社長にしてやればいい」

「ところが少し困ることもあるんです。いままで神経質だったのが楽天的になり、のんびりするくらいはいいのですが、喜びや悲しみにも反応が鈍くなって、無表情になり、自分の失敗に対しても後悔しなくなり、人生に対して前向きな真面目まじめさがなくなるのです」

「じゃあ、社長はすでにやられているのかな」

「あんまり巫山みざけ戯ないでください」

槌田は笑いながら、新しい煙草に火をつけた。

「お先に」といって、いままで将棋をさしていた二人が帰っていく。がらんとした編集室には、ばらばらと四、五人残っているだけである。

「おい、ちよつと腹が減つたな、なにかとうろ」

「もうこの時間じや井^{どんぶり}ものは無理ですね、寿司^{すし}にしますか」

「そうだな、安兵衛^{やすべゑ}に電話してくれ」

池谷はそのままトイレへ行く。槌田は安兵衛寿司へ電話をして、上寿司を二人前頼んだ。

「それで、そのロボトミーつてのは」

トイレから戻^{もど}ってきて、池谷が坐り直し、槌田はふたたびメモ帳を開いた。

「大体この手術は、不安とか苦悶^{くもん}、困惑、異常な興奮性を訴える精神分裂症、それと躁鬱^{そううつ}症や精神神経症などにおこなわれるわけです」

「するとAさんにやったのは、酒を飲んだ結果、異常な興奮性を訴える精神分裂症だというわけか」

「それが、病院では酒乱の気のある精神病質というだけで、はつきり精神分裂症と診断されているわけでもないのです」

「酒を飲めば、誰でも多少は興奮するからな」

「そうなんです」